



The Association of Liquid Filtration and Purification Industry

LFPI News Letter

Spring 2006 No.35

プロフェッショナルの発想



トリノ五輪も、日本選手団の健闘空しく女子フィギュアスケートの荒川静香選手の金メダル1個に終わった。閉会後の遅塚選手団長の記者会見も痛々しかった。大げさに言えばプロフェッショナルとアマチュアの違いを痛いほどに知らされたトリノ五輪だった。プロフェッショナルは、ラテン語で「プロフェッシオ」で公式に認知された職業、即ち専門家であり、素人ではないということである。素人はラテン語で「アマトル」という。愛人という意味だが、趣味で好んで何かをやる人間という意味に変化して「アマチュア」となる。もちろん公式には職業として認知されない趣味の段階である。欧米には専業に徹する社会が存在するが日本では何でもやります的社会が幅を利かしている。競技団体からの派遣推薦も基準があいまいで納得できるものでもない。オリンピックに参加することが目的であって、ゴールは出場までとするコメントが多い。まさにアマチュア国家のお手本である。クーベルタン翁が泣いて喜びそうな話である。

日本人の文化や伝統それに体力や環境などを加味し、一貫した強化策をもって対応しない限り世界のプロフェッショナルには勝つことは出来ない。バンクーバー（2010年）五輪に間に合わせる強化策がスタートするようであるが、安易な強化策では成果は期待できない。真の五輪選手を育てるプロ社会の構築（インフラの整備・スポーツ医学・専門トレーナー・

選手の将来設計等）は国家の大きな援助なくしては成功しないだろう。各国の取り組みに比してあらゆる分野で大きく遅れをとっている。娯楽の延長で参加を容認するほどばかげた無駄はない。

我々企業がこのような運営だとしたら、倒産への道しかない。若い社員に将来の夢を語りその実現のために、厳しさを喜びを共有しながら困難なプロセスを切り開いていくそして、会社の発展や社会人としての自己実現を可能にしていく。日本民族が古来より受け継いでいるプラグマティズム (Pragmatism) をもってすれば、欧米のシステムは同化できるはずである。

「たかが五輪」メダルの数など関係ないとの声もあるが、だからといってこのままでいいかというところでもない。たった一つの金メダル、この一つの金メダルにどれ程の国民が陶酔し歓喜したことか、国民はこの快挙をいつも期待して待っている。これが国民のエネルギーであり、参加する国の常識であることを忘れてはならない。

さて、弊社は創立46年を迎えようとしています。「水とニュー化学」の領域で常にお客様のビジネスを考えた、最適ソリューションの提案・解決までのプロデュースを果たすことを使命と考えております。当LFPI会員会社及び関係機関各位のご指導を賜りたく存じます。

伊 藤 建 樹

ハイモ株式会社 取締役社長

「具体例からみた企業の社会的責任」



講座風景

1. 講演

最近話題となることの多くなった企業に求められている社会的責任（CSR）とはどういうものなのかを、最近のトピックも交え原因や問題点およびその対策についてご講演いただきました。講演いただきました弁護士の五島洋先生は、現在飛翔法律事務所で実践色の強い企業法務を目指し、IT ビジネス・バイオ・各種先端技術・M & A などの法務をなさっておられるそうです。

さて、まず CSR の定義ですが、国連では「企業が人権・労働・環境・腐敗防止に関して国際的な認知を得たルールを支持し、実践すること」とされているそうです。また、より指針になり易い定義としては、「各企業が市民社会の一員としての社会的責任を果たし、当該企業に関係した各ステークホルダーの満足度を高めること」となり、そのテーマとしてはコーポレートガバナンスとコンプライアンス経営が特に重要になってくるとのこと。なにやら難しい内容ですが、平たくいうと“みんなちゃんとしましょう”ということでしょうか。なお、ステークホルダーの満足度を高めるために何をするかは、各企業が各々のステークホルダーの優先度をよく把握して決定すべきとのこと。手当たり次第に策を講じてダメということですね。何をにしても状況判断は大切です。

ここ数年、企業の不祥事が続いています。これは急に不祥事を起こす企業が増えたのではなく、今までごまかしてきたことが通用しなくなってきたということではないでしょうか。ネットなどによる内部告発も増えているそうです。これらの内部告発は力で押さえつけるのではなく、告発されないようなコンプライアンス経営をすること、外部に告発しなくても内部で相談できるシステムの確立が必要とのことでした。このように、コンプライアンス経営とは従来のリスクマネジメントの概念のようなマイナス要素を減少される管理体制ではなく、より積極的な行動でリスクを根本から排除し、さらに企業



五島 洋講師

価値をプラスにするシステムだそうですね。

では、CSR を実践するそのために何をすべきかということですが、ステークホルダーの満足度を高めるテーマとしては、環境・リスクマネジメント・情報管理と開示などがあり、不祥事対策という視点で見た場合は、コンプライアンスが中心となるそうです。コンプライアンス実現の具体的手法の説明もありましたが、個人的には“法令遵守のためには法令を正確に理解しなければいけない”ということが印象に残りました。知らないうちに違法行為をしてしてしまわないよう、身近なことから勉強しなければいけません。

最後に、CSR に取り組む場合、過剰な負担にならない範囲で、数ヶ月で確実に結果の見えるものからはじめることも良いでしょうとのことでした。これは CSR に限らず新しい物事を始める場合には共通していえることではないでしょうか。私も日々の業務に追われて新しいことは何かと拒絶しがちですが、CSR の重要性をよく理解して実践できることから始めていこうと思います。

2. 会社紹介

今回は、会場をご提供いただきました安積濾紙株式会社様より会社のご紹介がありました。1919 年創業の大変歴史のある会社で、工業用や家庭用に濾紙・濾布・不織布・エアフィルター、およびエレメント・ろ過器など幅広い用途の製品を生産されています。また、関連会社としては日本フィルターバック株式会社、上海安積濾品有限公司、AZUMI U・S・A INC を設立し、国内外で幅広く活躍されています。製品開発にも積極的に取り組んでいるとのこと、さらなるご発展が期待されます。

3. 交流会

講演・会社紹介に引き続き交流会が開催されました。はじめて参加させていただきましたが、なごやかな雰囲気の中活発に意見や情報交換がお



交流会風景

こなわれ、青年部会も回を重ねて連携が深まっている様子がうかがえました。〈ミウラ化学装置株 山中俊治〉

地下水適正利用委員会

設立主旨と活動内容

古代から人々は良好な湧き水の周りに集落を形成し、それがやがて経済の発展とともに大都市へと変貌してきた。湧水や地下水は適度なミネラルと水温により、飲料水の水源として最も価値の高いものである。その一方で、地下水は産業用水やビル揚水としても大量に使われ、日本では沿岸部を中心に大規模な地盤沈下を経験してきた。このため、これらの都市・地域では法律や条令による地下水揚水規制がかけられ、工業用水やビル揚水などの地下水揚水量が急激に減少した。このため一部の都市では、過去30年来、地下水水位が回復しつつある。このことは、地下に建設された鉄道駅などのインフラに大きな浮力を及ぼすなど予想外の影響をもたらす一方で、地下水汲み上げ規制の有効性を示す根拠となっている。その一方で、最近の膜ろ過技術を中心とした浄水技術の進展により、コンパクトで維持管理が容易な浄水プラントにより地下水の浄水処理が可能となった。かつては、口径1インチの小規模な井戸では採算が合わなかった地下水の利用も、浄水技術や地下水ポンプの進歩により、十分に採算があうようになってきた。このような背景から、近年、地下水を利用した専用水道が増加しつつあり、病院やスーパー、ホテルなどの大規模施設が公共水道から地下水を利用した専用水道に切り替える事例が増加している。このため大規模ユーザーの公共水道ばなれが社会的な関心を呼んでいる。このような社会的な関心の高まりとともに、地下水の適正な利用について様々な角度から検討が必要となっている。地下水適正利用委員会では、地下水利用に関する諸問題を整理し、公共の利益を尊重しつつ、地下水の適正な利用を図るための方策についての議論を行う。また、地下水の水質は地域によって大きく異なり、特に都市部の地下水は様々な汚染を受けている可能性がある。しかしながら、地下水の水質については行政の環境部局が毎年行う汚染調査が主であり、調査項目以外については十分にデータが公開されているとはいいがたい。そこで、地下水適正利用委員会では、委員会会員企業などが地下水の現状に関するデータを持ち寄り、それらを積極的に公開することによって、地下水水質の現状を明らかにし、地下水汚染の問題とその対策技術についての検討を行う。特に地下水水質に適応した処理技術に関しては、地下水適正利用ガイドラインを作成することを目的としている。本委員会は、これら目的を達成するため、学識者及び会員企業により構成され、平成18年度から19年度の2年間にかけて活動を行う予定である。

〈東京大学大学院工学系研究科 都市工学専攻 滝沢 智〉

アメリカ滞在報告

サンフランシスコ滞在報告(その1)

平成17年3月から平成18年1月までの約10ヶ月半の間、文部科学省「平成16年度海外先進教育研究実践プログラム」の支援を受け、米国カリフォルニア州サンフランシスコ市にある University of California, San Francisco (UCSF) に滞在した。滞在の目的は、体外診断技術への応用を目指したナノバイオテクノロジーに関する研究、およびシリコンバレーにおける研究・技術開発の実態に関する情報収集活動の二つである。

UCSFはヘルスケアに関する分野で世界トップクラスの医療、教育および研究を行っている大学で、キャンパスはサンフランシスコ市内に点在している。私はその病院の一つである San Francisco General Hospital (SFGH) の付属研究所に訪問研究員として滞在した。



San Francisco General Hospital 外観

滞在した研究室は、主に一本鎖抗体を提示するファージディスプレイライブラリに関する研究に取り組んでいる Dr. Bin Liu の研究室である。研究室のメンバーは多国籍で、Dr. Binに加え、米国人2名、フランス人1名、ギリシャ人1名、中国人2名の計6名のポストドクからなる。研究室の一日は、人によるが、朝は比較的遅く10時ぐらいから始まり、夕方7時以降まで実験している人は2名程度であった。皆黙々と研究に取り組んでいた。また、クリスマスパーティーなど多くのイベントが催され、研究のみならず楽しいひとときも過ごすことができた。

研究内容は、無機ナノ粒子を特異的に認識するペプチドの探索である。このテーマは、生命が様々な物質を自己組織的に合成していくプロセスを模倣した物質生産方式確立のための基礎的な研究であり、ナノバイオテクノロジーと呼ばれる学際分野の研究である。シリカおよび金コロイドなどの無機ナノ粒子に特異的に吸着するペプチドを滞在先のラボが得意とする技術であるファージディスプレイライブラリ法で探索した。

(つづく)

〈横浜国立大学 中村一穂〉

3月技術講座報告「液体清澄化の先端実用ハイブリッド技術」

2006年3月3日(金) ヨコハマプラザホテル

1. ハイブリッドプロセスとは何か

(横浜国立大学 松本幹治先生)



従来の単一技術だけでは分離や反応が不十分な技術を補う方法として、ハイブリッド技術の説明を自動車のHVカー(モーターとエンジンの組み合わせ)を例題にご説明いただきました。私も以前トヨタさんでHVモーターの部材に関わっていたので、良く理解できました。目的とする反応・分離機能を他の分離機能・方法と組み合わせ、より効果的かつ経済的な分離が実施できるように工夫されたプロセスをハイブリッドプロセスとされています。

次に具体的なプロセスの実施例については、膜を使用したハイブリッドプロセスの形式を(I)多段式(II)複合式に分けられた上で、膜の機能別に(1)分離・濃縮(2)分画・分級(3)隔離(4)固定・吸着(5)選択性(6)制御性(7)複合化という7つの機能に分けて、それぞれ他分離技術とのハイブリッド化をご紹介いただき、複雑なハイブリッドプロセスの機能面をわかり易く説明していただきました。

また、最後に今後の展望として、熱・光・PH・イオン強度などの外的刺激により膜の機能が変化する膜が開発されてきており、これらの刺激応答性の膜をハイブリッド膜プロセスに組み込めれば、より効率的なプロセスが開発される可能性についてもご紹介ありました。我々も膜に関わっている者として、より多様な機能性膜を提案していきたいと考えます。

2. 樹脂と膜のハイブリッド化(純水製造)

(日本錬水株式会社 原田克範氏)



既存技術であるイオン交換膜電気透析法は、電気を駆動力とし連続的に脱塩することは可能でした。ただし純水のような高度の水を製造することは難しいという欠点があり、イオン交換樹脂法では、高純度な水を製造する事は容易ですが、一定量の処理後には再生工程が必要となり、その間製造が停止する欠点がありました。

今回ご紹介頂いた電気再生式純水装置は、1980年代に国内で発表された比較的新しい技術であり、イオン交換樹脂・電気透析の技術を複合する事により、連続して純水を製造でき、イオン交換樹脂のように再生の際にも排水が発生しない従来の単独技術の欠点を補うことが出来るシステムです。

ただし、市水や工業用水を原水とすると、水質によ

て原水の硬度成分やシリカによるスケールが形成されスムーズに運転が出来なくなり、電力消費量も大きくなるという問題がありました。

最終的には前処理にROを組み合わせる事で、電気再生式純水装置が実用化となりました。

実例の説明では、イニシャルコストの問題は残るとしても、イオン交換樹脂で必要な再生薬品や時間、電気透析で問題となる透過水質から、このハイブリッドシステムは現状では最適と考えられます。

3. 膜とクロマトのハイブリッド化

(東海物産株式会社 柳内延也氏)



各種天然エキスには、様々な機能性成分が含まれており、今回はその精製方法を通して、膜とクロマト法とのハイブリッドプロセスをご説明頂きました。

今回、精製対象の物質はチキンエキスに含まれる塩基性の抗酸化ジペプチド(アミノ酸2個 分子量240)で、その純度UP(アレルゲン物質の除去)・濃縮を目的としています。チキンエキスはラーメンのスープなどの原料として有名ですが、有効成分を精製する工程で、風味などが抜け清涼飲料水などへの添加も可能になり、利用の範囲が広がることは今後の膜ビジネスとしても興味深いことです。

また、今回の抗酸化物質については、通常市販されている物がほぼ100%植物由来であるのに対して、チキンエキス(動物性)由来の抗酸化物質は、非常に特殊とのこと。植物由来の物は同じ植物体内で発生する抗酸化物質には有効であるが、動物しか作らない抗酸化物質(次亜系)には全く働かないというのは驚きでした。

これ以外にパネル展示で、タイなどで使用されている魚醤(ナンプラー)の嫌な臭いを、高分子吸着物質を混ぜて限外ろ過膜でろ過処理することで、美味しく変化させられるといった事例の紹介もあり、私の常識を覆されました。

ハイブリッドプロセスを既に実用化されている例をご説明頂き、大変勉強になりました。

(日東電工マテックス(株) 北野孝宗)

4. 生物と膜のハイブリッド化

(栗田工業株式会社 澤田繁樹氏)

澤田氏は、排水処理分野における「生物処理(活性汚泥処理)×膜濾過」のハイブリッド化について述べられた。MBR(Membrane Bioreactor)の名で、近年急速に実用化が進んでいる技術である。冒頭、ハイブリッド

3月技術講座報告「液体清澄化の先端実用ハイブリッド技術」



は「 $1 + 1 > 2$ 」を目指すべきであるというご自身の考えを述べられた後、氏の長年に渡る豊富な排水処理および膜技術の経験から「生物×膜」の歴史に触れられ、「汚泥槽内 MLSS 濃度を 1 桁高めて生物処理を効率化する（増能力化する）」ニーズから「生物×膜」のハイブリッドが生まれたいきさつを述べられた。その後、氏ご自身の工夫によるテスト装置による豊富なモデル実験データおよびそれらデータの化学工学的解析結果を示され、濃い汚泥を濾過するため膜面に汚れ物質（濃度分極層あるいはゲル層）が蓄積されやすい MBR の運転を成功させるためには、「膜面にクロスフロー流をきちんとつくること」が最重要であることを強調された。また、MBR ではクロスフロー流はばっ気によるエアリフト上昇流に依るため、「きちんとかつ効率良くばっ気を行うことが大事」であり「膜の開発だけでなくばっ気技術の開発も劣らず大事である」ことを強調された。最先端の技術を原理に基づきわかりやすく説明された講演であった。

5. オゾンと膜のハイブリッド化

（水道機工株式会社 鬼塚卓也氏）



鬼塚氏は、下水処理分野における「オゾン処理×膜濾過」のハイブリッド化について述べられた。初めに背景として「下水再生利用の現状と期待」について述べられ、世界の水資源は量の問題（乾燥地域拡大、人口増等）および質の問題（未処理下水による水源汚染、水を媒介とする感染症拡大等）が深刻化しつつあり、「下水の水資源としての利用」への期待の高まりを指摘された。日本においても「下水の再利用」はトイレ用水や環境用水（公園噴水等修景用水）等で進みつつあるが、O-157 問題等をきっかけに省令により「高水質の再生水」が求められるようになった現状を述べられた。この要求に対し従来技術は十分な解を与えず、「オゾン処理×膜濾過」が解の 1 つになることを述べられた。現実の処理プロセスは、「生物濾過→オゾン処理→膜濾過」の 3 種複合ハイブリッド構成である。生物濾過でアンモニア性窒素等窒素分を減らし（オゾン負荷を下げる前処理）、オゾン処理で脱臭脱色や有害物分解をしつつ後段の膜汚染抑止を行い、最後に膜濾過により濁質除去を行う。事例として東京都下水道局・芝浦再生水製造プラントの例を紹介され、品川・汐留地区のビルのトイレ用水や、道路散水（打ち水によるヒートアイランド対策）に実際に用いられている現況を紹介された。

6. 汚泥濃縮と脱水のハイブリッド化

（巴工業株式会社 平松達生氏）



平松氏は、汚泥処理における「汚泥濃縮×脱水工程」のハイブリッド化について述べられた。初めに、これら 2 工程が分かれている現状では、濃縮工程では汚泥腐敗進行が進みやすく結果として臭気問題や難脱水性化問題が起こること、全体として処理スペースが大きくなること、ランニングコストが高くなることなど、現状プロセスの問題点を指摘された。次いで、これら現状問題の解決のために「濃縮工程と脱水工程のハイブリッド化」が有効であることを述べられた。濃縮工程と脱水工程のハイブリッド化（複合化）達成のポイントは、両工程を 1 台で同時に行える遠心機の開発にある。氏らによる遠心機内部構造設計の工夫により、現状は別々に 2 台の遠心機で行う濃縮工程と脱水工程を、1 台の遠心機で行うことが可能になった。実際に両工程を 1 台の遠心機で行うことが可能になった状況を、2ヶ所の下水処理場の汚泥処理における実証実験のデータから示された。初めに、最適運転条件の確立を詳細かつ豊富な実験データから示され、次いで現状技術に対する経済的優位性を、詳細に検討された経済性計算結果から説明された。ハイブリッド法は、現状に比べ電力費は高くなるものの、脱水性の大巾改善等に基づくコストメリットが大きく、トータルの経済性が大巾に改善される。

交流会

講演終了後、ホテル内同フロアの会場にて、交流会が立食パーティー形式にて行われました。技術講座に参加された方は、ほぼ全員が参加されました。初参加の私は、初め緊張して望みましたが、すぐに各テーブルの歓談の和に入ることができ、さまざまな業種分野にわたる先輩諸氏から貴重なお話を聞くことができ、たいへん濃い有意義な時間を過ごすことができました。会の進行とともに座が盛り上がる中、あっという間に予定の 1 時間半が過ぎました。最後は、栗田工業(株)澤田氏による締めで、盛り上がりの余韻を残しつつの散会となりました。



交流会風景

〈旭化成ケミカルズ(株) 久保田 昇〉

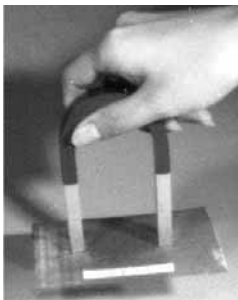
新製品／主力製品紹介

このコーナーは名簿順に掲載しておりますが、新製品発表がタイムリーな時期にあたる会員企業には優先的掲載を検討致します。富士フィルター工業(株) 卜部宛ご連絡下さい。(E-mail:urabe@fujifilter.co.jp)

マグネステン®金網

〈製品概要〉当社によって開発された2相ステンレス鋼「マグネステン」は強度が高く、優れた耐食性を有しながら磁石に反応致します。ふるい分け用金網等、類似製品には最適です。

Patent No.336138



〈特徴・仕様〉

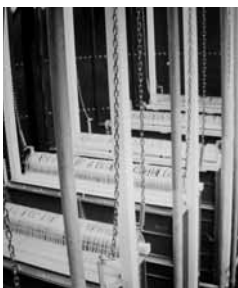
- 金属探知機及び磁石に容易に反応
万一金網が破損して金属線が粉体に混入しても“磁石にピッタリ”除去出来ます。
- 高い耐久性
特に塩素系雰囲気に対して有効です。海中1000日間での腐食測定結果でも他のオーステナイト系よりも大きく優れています。
- 耐応力腐食に優れています
- 引張り強度はオーステナイト系よりも約40%アップ
使用実績＝食品工業、塩素系化学工業、その他窯業、薬品関連など。
製作範囲＝大きな目合いから125ミクロンまで約160品種の在庫をしている。

真鋼工業株式会社

〒537-0013 大阪市東成区大今里南4丁目1番8号
TEL (06)6974-8888(代) FAX (06)6976-7571
URL: <http://www.manabe-jp.net>

MO－膜分離活性汚泥システム

〈製品概要〉排水処理で広く用いられて来ております活性汚泥法は高効率ですが、排水処理条件の変動等から良好な処理状態を常に保つ微生物制御は難しく、高度な運転管理技術が求められます。この問題点を膜分離技術による浸漬膜利用により、微生物管理の専門家でなくとも容易な運転管理にて高度な処理状況が安定して得られるコンパクトなユーティリティー設備とすることが出来ます。



〈特徴・仕様〉

- コンパクトで、装置スペースが1/2以下
10000mg/L以上の高汚泥濃度にて運転可能で、省スペース。
- 運転管理が簡易
汚泥沈降性に煩わさせることなく、運転管理は極めて容易。
- 高度な処理水
常時安定して低BOD、SS=0の高度な処理水が得られます。また処理水の再利用も可能となります。
- 高い透過水量を長期間維持
膜モジュール下部から通気し透過水量を長期間持続されます。また薬品洗浄を行うことで膜寿命も長期間確保できます。
- 遠隔監視システム構築も可能です。

森永エンジニアリング株式会社

環境事業部
〒108-0075 東京都港区港南3-8-1 森永乳業港南ビル
TEL (03)5796-9802 FAX (03)5796-9813
URL: <http://www.morieng.co.jp>

人工炭酸泉製造装置「エクセルカーボ」

〈製品概要〉スーパー銭湯や高齢者介護施設などの温浴施設に人工炭酸泉を製造・供給します。炭酸ガス濃度が1000ppm以上の炭酸温泉は天然でも珍しく、温泉王国と言われる日本でも大分県長湯温泉などごく一部にしか存在しません。水道水や井水が原水であっても、三菱レイヨンが開発した特殊なガス溶解技術が、付加価値の高い“人工温泉”の提供を可能としました。



〈特徴・仕様〉

- 全ての機種で1,000ppm以上(出口濃度)の高濃度人工炭酸泉が製造可能です。
- 豊富なラインナップで個浴サイズから10人以上の大型サイズまで対応可能です。
- 循環ろ過浴槽向けEC500Sシリーズ、掛け流し浴槽向けEC500Sシリーズがあります。
- 過剰ガスの浴槽流入防止機能を初め、各種の安全機構を標準装備しています。
- ECX500シリーズは溶解炭酸ガス濃度の自動制御機能／濃度表示機能付きです。

MRC・ホームプロダクツ株式会社

メディカル事業部
〒103-0016 東京都中央区日本橋小網町14-1
TEL (03)3669-4753 FAX (03)3669-4758
URL: <http://www.co2spa.com/>

企業紹介

株式会社石井工業

当社は配管と据付工事を主体とし、水処理プラント施工や工場各種設備工事を行っており、首都圏を中心に全国各地でも対応しております。

これからの将来を見据えて、時代の改革、お客様のご要望に対応できる人材の育成と、技術力の開発を積極的に進めることに力を入れております。

経営理念は『快適な環境づくりで社会に貢献』であり、基本指針は“水と空気とエネルギー”です。

『水』… 用水から排水まで幅広く対応し、リユース・リデュース・リサイクルの3Rを考慮した事業展開を進めてまいります。

『空気』… CO₂、ダイオキシン、アスベスト等、法規則の整備と共に新しい技術そして多様なエンジニアリングで改善と再生を図ってまいります。

『エネルギー』… 風、水、太陽光、省エネルギー等、時代の変革と共に新しいスタイルの活用を進めてまいります。

真心と万全のサポート体制で、常に新しい技術と知識を養い、より進んだサービスを心掛け、お客様との信頼関係を築いていくことを目指しております。
(藤川正明)

株式会社アースプロテクト

私たちの住んでいる地球は今、目覚ましい人類の繁栄と技術の発達と共に、一方では環境破壊が進んでいます“私たちに出来る事”をまず考え「美しい環境を守り創造する事」をテーマに掲げて1999年11月にアースプロテクトを創業いたしました。

排水処理、純水製造プラント、各種制御盤製作、土壌汚染の調査及び改善、屋上緑化などの設計・製作・施工・維持管理など、自然との調和を保つ環境保全機器を中心にバイオに至るまで自社で一貫して取り組む姿勢で現在に至りました。

最近では、光触媒及び光酸化などの技術を産学連携で研究開発を行い、新技術を取り入れた装置の納入実績も増えて来たところです。

今後も環境事業の総合プランナーとして、より良い製品を皆様へ提供出来ます様、技術の革新とサービスの向上に努めますので宜しくお願い致します。
(佐藤友一)

加藤化学株式会社

当社は麦芽水飴の製造販売メーカーとして昭和20年創業以来、技術を磨き品質を高め“信頼のブランド「一富士印」”として水あめ、異性化糖、コーンスターチなどの製造販売をしています。

“一粒のコーンを化学する”を私たちの使命として限りなく素晴らしい可能性を秘めたコーンのエネルギーを最大限活かすために、今日までさまざまな取組みを展開してきました。

コーンから生み出された製品は業界トップクラスの生産量を維持し、我が国初の連続方式による純果糖の開発など、先端技術でも一歩抜きんできています。

弊社はこの大いなる自然の恵みを余すところなく合理的に活用するためにたゆみない技術革新を重ね、同時に設備を整えてきました。より高品質の製品をローコストとシステムを構築し、一層の充実を追求しながら生産設備の近代化を推進し、コーンからコーンスターチ・ぶどう糖・異性化糖・高果糖液糖・純果糖までを連続して生産する方式で、常に安定した高品質を実現する生産技術を確立、併せて品質管理面の強化にも取り組み、原料輸入から製品出荷に至るまで厳しい品質検査を繰り返し、常に万全を期した製品安定性の確認を実施し品質向上の成果を上げてきました。

本会に入会させていただき知見をひろめ今後もこの素晴らしい可能性を秘めたコーンのエネルギーを最大限活かすために、更なる生産技術と製品品質を向上させ社会に貢献したいと願っています。
(斎藤永達)

株式会社セラリカ NODA

当社は1832年(天保3年)の創業以来170年にわたり「生命ロウ」の精製一筋に取り組んできた老舗ワックスメーカーです。生命ロウは昆虫や植物から得られる天然のロウで、当社はあらゆる種類の生命ロウの開発、製造ならびに販売を行っております。生命ロウは石油系のロウからは得がたい熱特性、複合機能性、安全性など優れた特性を有し、これらを活かす用途開発を進めることで、安全性が重要な医薬化粧品等の生活産業分野から、コピー機のトナーや情報記録材など先端産業分野にまで利用用途を拡げてきました。

当社は、「途上国貧困地区で生命ロウを産出する植物や昆虫を育て、用途開発をし輸入を増やすことで現地の人々を貧困から救い出すとともに現地の環境を向上させ、昆虫や植物が生命を維持するために体内で作り出す生命ロウの機能を活かして人間の健康と安全を守る」という善循環型社会作りを目指し、これをセラリカ構想として提唱しています。

今後はさらにより品質の生命ロウの開発を目指しておりますので、LFPI会員の皆様よりご指導頂ければ幸いです。

(藤間義人)

会 告

1. 環境と経済分科会 講演見学会のお知らせ

日時：5月26日(金) 13:30～17:00(交流会17:30～19:30)

13:00つくば駅集合

講演・見学先：(独)産業技術総合研究所

環境管理技術研究部門

講演はリサイクル技術関連を予定しております。

会費：@8,000円(うち交流会費4,000円)

※詳細につきましては、別途送付される案内をご覧ください。

2. 会員交流会のお知らせ

恒例となっておりますLFPI会員交流会を下記の日程で開催致します。会員の皆様には、ふるってご参加下さいますようお願い致します。

日時：平成18年6月9日(金) 13:30～19:00

会場：横浜国立大学

※ 詳細につきましては、別途送付される案内をご覧ください。

編集/発行：日本液体清澄化技術工業会 広報委員会
住所：〒194-0032 東京都町田市本町田2087-14
TEL (042) 720-4402 FAX (042) 710-9176
LFPIホームページ <http://www.lfpi.org>